

『トコトンできるまで教育』の実現に向けて

平成25年度～令和元年度 選定

鈴鹿医療科学大学



取組のポイントや補助効果等

- ◆「医療・福祉スペシャリスト」を育成する独自の教育カリキュラムを構築
- ◆ IR機能、PDCAサイクル確立による教育支援体制の整備

鈴鹿医療科学大学は1991年に日本で初めて設立された「4年制医療系大学」であり、現在は4学部9学科13専攻分野を有する医療系総合大学まで成長を遂げた。

保健衛生学部・医用工学部・医療科学研究科を有する千代崎キャンパスと、薬学部・看護学部・薬学研究科を有する白子キャンパスは、広々とした土地にグラウンドや医療実習機器を多数そろえ、「医療・福祉スペシャリスト」育成に向けた環境が備えられている。2021年4月には新たに医療健康データサイエンス学科の開設を予定しており、「Society5.0」に向けた教育体制を作り上げていっている。

取組の目的・背景

「科学技術の進歩を真に人類の福祉と健康の向上に役立たせる」という建学の精神のもと、「知性と人間性を兼ね備えた医療・福祉スペシャリストの育成」を教育理念に掲げ、医師のみではなく医療技術者まで一体となった医療の発展を目指し、診療放射線技師や理学療法士といった専門技術者や研究者を数多く養成・輩出してきた。

しかしながら2012年以前は、学科間の垣根が高く、同じ大学にありながら他学科や大学全体を意識した改革がなされず、言ってみれば「木を見て森を見ず」という状態が続いていた。

このような中、2013年度に始まった私立大学等改革総合支援事業「教育の質的転換」（以下、改革総合支援事業）は、大学教育の全国標準モデルとして相応しい内容であり、これを実現させるため、学内での意思決定を迅速に行った。そして理事長から指針が示され、他大学との差別化を図るべく「医療・福祉の総合大学としての独自の特徴を表現した教育方法」を具体化することを命ぜられた。それが2014年度から始まった「医療人底力教育」の取り組みである。学内理解や教育の質を確保する仕組みづくりに約3年間を費やし、各学科の垣根を取り除いた全学共通の特色あるカリキュラムを完成させた。

また、学内の大規模な教育改革と連動して改革総合支援事業にトコトン取り組むことで、教職員には大学全体を見渡す視野を持つまでの変化が見られた。改革を牽引したのは、学長と教務・教育改革担当副学長であり、強いリーダーシップと改革を成し遂げるという意志によって学内が一つとなった。その後も、この改革ムードの流れに乗って新たに打ち出される改革総合支援事業の全国標準モデルに対応した結果、7年連続で採択された。

当大学にとって改革総合支援事業は、全学的な取り組みを推進するための重要な役割を果たすとともに教育改革を加速させるエンジンとして位置付けられている。

取組内容

理事長からの指針を受け、学長、副学長が中心となって教育改革がスタートした。これは開学20年来の大改革として、向こう10年、20年、通用する教育システムの構築を目指すものであり、各学科内に設置された教育質保証委員会のもと、教育の質向上に向けた取り組み、さらにはSociety5.0に向けた新たな学科の設置が進められている。

理事長からの指針

- 現在の教育の手直しではなく新しいものを作る
- 大学や教職員本位ではなく頑張る学生本位
- 医療・福祉系総合大学として幅広い魅力ある教育を確立する
- 学部学科を超えた全学的視点で教育全体を検討する

具体的な3つの姿

全学共通の医療・福祉スペシャリスト育成・教養教育	学部や学科間の壁を取り払い学科間のつながりを持たせたオープンな全学共通教育。特に医療のスペシャリストに相応しい教養と常識の徹底。教養教育、倫理観教育、思いやり教育の充実。当大学に入学すればこういう魅力ある教育が受けられるということがアピールできる教育内容であることが必要。
全学共通の基礎科目の設定	基礎科目のうち全学共通で実施すべきものを設定し、学部・学科間の垣根を越えて共通で行う。基礎科目の一部としてすべての分野の内容を学ぶ幅のあるカリキュラムを設定し、医療・福祉系総合大学としての特色を出す。
専門教育の見直し及びスリム化	専門教育について、履修単位数を見直し、基本となるコアカリキュラムを厳選し、凝縮されたカリキュラムを再構成する。さらに、必修科目・選択科目のバランスや授業科目の実施時期についても見直す。

医療人底力教育

医療人底力教育は、2014年にスタートした当大学独自の初年次教育カリキュラムである。2012年に卒業後1・2・3・4・5・10年目の卒業生を対象としたアンケートをもとに作り上げられたもので、専門科目の教育だけでは培うことのできない基盤的な技能・知識・資質の教育を目的としている。学科の垣根を越えた総合的な授業編成が特徴となっており、とりわけ1年生必修科目「医療人底力実践」では、全学科混成のクラスを編成し、学科の枠にとらわれない柔軟な姿勢・思考を身に付けることを目指すなど、幅広い多様性のあるカリキュラムを4年間設定し、医療・福祉系総合大学としての特色を打ち出している。

全学的な組織「医療人底力教育センター」

私立大学等経常費補助金ファイル

(交付額：千円単位)

	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度
一般補助	326,156	396,020	367,547	434,296	484,970
特別補助	36,201	35,305	42,278	28,596	28,316
補助金合計	362,357	431,325	409,825	462,892	513,286
改革総合支援事業 選定タイプ数	1	1	1	1	1

※改革総合支援事業は4タイプ中の選定数（2017年度及び2018年度は5タイプ）

のもとで管理されており、授業内容や実施方法についても全学的組織が関与して決められている。さらには担当する教職員の協力のもと、医療人底力教育のためのオリジナル教科書を作成し、学生の学びに役立てるなどの工夫が見られる。

また、このカリキュラムの授業には職員が教員とともに授業指導やサポートを行っており、学生のみならずOJTによる教職員同士の能力養成にもつながっている。教員にとっては、普段つながりの少ない他学科の教員と交流することで、お互いの授業の取り組み方を共有するなどして教授スキルを高めることができる。学生と関わる機会の少ない法人職員なども授業という現場に出て学生と直接関わることによって、それまで見えていなかった学生の存在を意識しながら、職責を果たす中で、職務にやりがいも感じられていると言う。

多職種連携教育

1年次の医療人底力教育を経て、2年次以降に行われるのが多職種連携教育である。専門分野にとらわれず、他職種理解と多職種連携の必要性和意義を学び、医療人としての総合力を養い、社会の求める高いレベルの医療人教育を目指している。

鈴鹿医療科学大学の教育システム

医療人底力教育	医療人底力実践	1年次	必修科目初年次教育（全学科横断カリキュラム）
	多職種連携教育	1年次	選択科目（座学）慢性疼痛で学ぶチーム医療（基礎） ※三重大大学との合同科目
		2年次	必修科目（座学）多職種連携の基礎 選択科目（WS）慢性疼痛で学ぶチーム医療（実践） ※三重大大学との合同科目
		3年次	選択科目（WS）事例で学ぶ多職種連携
		4年次	選択科目（学外実習）実践で学ぶ多職種連携

■ 三重大学との合同実施

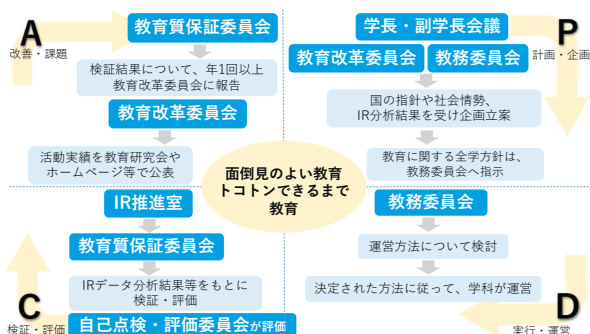
三重大学とは、文部科学省が推進する「課題解決型高度医療人材養成プログラム」に合同で応募し、2016年度に採択され、多職種連携教育の授業科目を合同で開講している。この授業をきっかけに、受講生たちが自主的に「学生サポーターの会」を立ち上げ、講演会や交流会などを開催し、多職種の仲間や後輩との情報交換の場として活動している。

≡ トコトンできるまで教育

「医療人底力教育」、「多職種連携教育」の教育システムや学生の学びを徹底的に支援する体制である。学生のレベルや理解度に合わせたよく分かる授業、身に付く授業を目指し、クリッカーや頻繁な小テストの実施等により、学生の理解度をきめ細かく把握することで確実に学力が身に付く授業を目指す。あわせて学修支援システムを活用してYouTube等の動画を公開し、学生の自主学習やリメディアル教育に役立て、解説動画では聞きなれた教員の声のため予習・復習に好評である。

また、IR推進室と連携して早期の段階から成績不振学生の個別指導に取り組んでおり、1年前期の定期試験後に成績不振者リストを学科長へ報告、教育質保証委員会で学修指導内容を検討し、担任教員に指示する流れとなっている。

こうした様々な支援体制を整えることで、個を見逃さない魅力ある教育を実現させた。その結果、休学・退学者を減らし、修業年限卒業率の向上につながったと考えられる。



教育の質保証に係るPDCAサイクル図

≡ 数理・データサイエンス教育

医療健康データサイエンス学科の創設に当たっては、理事長が文部科学省等といった国の答申や社会情勢を受け、今後の大学に課された社会貢献に価する数理・データサイエンス分野教育に向けた構築について学長へ示唆し実施に至った。

医用情報学の基盤的な内容だけでなく、最新の技術分野や社会における具体的な電子カルテ等の実データを活用した実践的教育を含んだカリキュラム構成で少人数やアクティブ・ラーニングを中心とした教育を提供する予定である。

医療健康データサイエンス学科 (2021年4月開設予定)	
学科誕生の背景	AI (人工知能)、IoT (モノのインターネット)、ロボット、ビッグデータ等。これらの最新技術を最大限活用し、新たな未来社会を実現する「Society 5.0」のプロジェクトが国を挙げて進められている。 この最新技術は、少子高齢化が進む中、国が抱える問題解決につながるものとして、保健・医療・福祉を含め、あらゆる分野で大きな期待が寄せられている。この動向に対し、医療・福祉の総合大学のメリットを最大限に活用して誕生するのが、医療健康データサイエンス学科である。
育成する人材像	保健・医療・福祉に関するデータの意味を理解し、それらを医療健康データとして統合し、分析する能力を身につけた人材。具体的には、医療健康データ環境を構築し、AIなど最新の手法を駆使してデータを分析し、さまざまな課題解決のためのプロジェクトをマネジメントできる人材を育成。
学びの特徴	当学科では、データサイエンティストに必須の統計学やプログラミングをはじめ、医療健康分野の基礎から応用まで修得できるカリキュラムを構成している。また、文系出身者でも確実に知識やスキルを身につけられる環境が整備されており、安心して学ぶことができる。

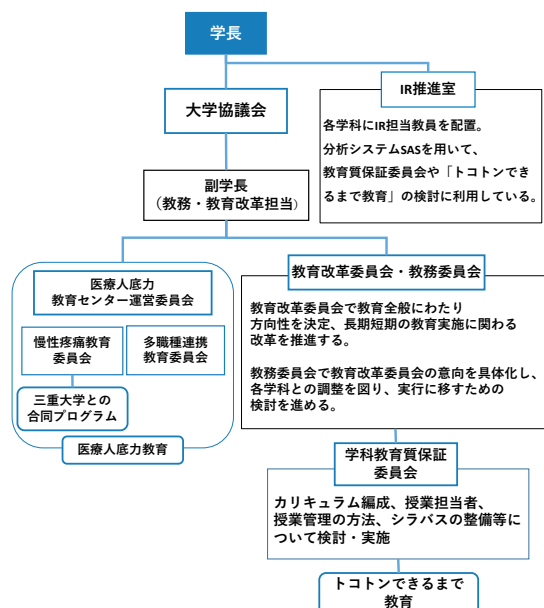
学びの特徴



医療に改革を!



实施体制



实施体制図

成功のポイントや苦労した点

当大学の教育では多職種を知り、チーム医療の必要性を理解させることを大切にしている。これを実現させるための学長、副学長の強いリーダーシップ、そして改革総合支援事業により全国標準モデルが示されたことで学内が動き出し、新たな教育システムを確立することができた。

2014年度に医療人底力教育を開始した当初は、変化を嫌う資質の教職員が多く、特に授業構築には、固定観念や従来のしがらみのよ

うなものが学科間を超えた連携の弊害となっていた。学科による温度差も大きく、批判や反対する意見は何年も続いたが、辛抱強くかつ粘り強く各教職員と向き合い、話し合いを重ねた結果、次第に理解が得られるようになった。現在、この教育に関わる約60名の教職員が学生の成長を実感し、また教員同士のコミュニケーションが生まれ、学修方法や学生支援等のFDにつながるなどプラスの効果波及している。

今後の課題・展望

「高度な知識と技能を修得し、チーム医療を担う力を身に付けることができた」という卒業生調査で「当てはまる、ほぼ当てはまる」と回答した学生は2018年度の78%から2019年度には87%まで増加した。

建学の精神に基づき、知性と人間性を兼ね備えた医療・福祉のスペシャリストを育成することを使命としており、将来、日本の医療と福祉のリーダー的存在となって活躍する人材を多数輩出することを目指している。

そのためには、今後もさらなる改善に結びつけるため、IR情報を活用したPDCAサイクルによる各取り組みの検証と改善を継続していく。また、コロナ禍にある現状に鑑み、新しい生活様式における授業実施に向けた教育形態のさらなる改革を進めている。

改革成果を示す客観的な数値データ（抜粋）

実績項目	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度
志願者数	3,214人	2,887人	3,233人	2,903人	3,302人
退学率	2.8%	2.8%	3.1%	3.6%	2.2%
休学率	3.7%	4.4%	4.8%	4.7%	2.4%
修業年限卒業率	73.3%	70.1%	70.6%	70.8%	74.4%
卒業生成績（平均GPA）	2.36	2.38	2.52	2.47	2.45
就職率	97.9%	97.8%	97.8%	97.3%	98.7%
国家試験合格率	86.6%	92.1%	84.6%	91.1%	91.2%
リメディアル学習延べ利用者数	84人	20人	45人	94人	116人